学校図書館を活用した「読み」を鍛える拠点校事業　実践記録

研　究　主　題

自分と集団の考えを発展させる探究的な授業づくり
～　つかむ・生かす・伝え合う力の育成　～

香美市立鏡野中学校

実践概要：
各教科部会が１チームとなり，図書館資料や新聞の活用を通して言語能力及び情報活用能力の育成を目指した授業づくりを研究した。全国学力・学習状況調査，リーディングスキルテスト等から明らかとなった「読解力」に関する現状課題の解決に向けた授業研究が各教科等で実践された。国語科部会の授業づくり講座に取り組む体制が，各教科部会，学校全体に良い影響を及ぼし，教科主任会が教科間の連携を高めた。それらの取組を，校外の研究組織と連携しながら，公開・普及することができた。
キーワード：　言語活動の充実，情報活用能力，教科部会，教科主任会，リーディングスキルテスト

１．研究仮説

探究的な授業づくりにおいて，指導者が目的を明確に示し，情報を的確（論理的）に読み解かせたり，情報を整理・比較してその関係性を捉えさせたりしながら自分の考えをもたせ，表現させる場の設定や指導上の工夫をこらした学習活動の展開を心がけていけば，生徒は主体的に読んで自分の考えもち，それを的確に表現することができるようになるであろう。

２．実践方法

（１）図書館資料や新聞等を活用し，言語能力及び情報活用能力を育成する授業の実践
①読解力に関する校内研修
②「鏡野中学校授業スタンダード」に基づいた，図書館資料や新聞を活用した探究的な授業構想の研究，指導案検討，授業実践，研究協議
③図書館資料を活用するための組織づくりや環境整備
（２）リーディングスキルテスト，全国学力・学習状況調査，高知県学力定着状況調査の分析及び結果の活用に関する研究

３．実践内容

（１）図書館資料や新聞等を活用し，言語能力及び情報活用能力を育成する授業の実践

①年度当初に校内研修を行い，本校における「読解力」とは，「情報を取り出す→判断する→熟考する→表現する」までのこととし，「読み」を鍛える授業では，言語活動の充実と，「語彙力の育成」「情報活用能力の育成」「自己の考えの形成」の３要素の中から，「情報活用能力の育成」に焦点を当てることなど，研究に関する共通確認を学校全体で行った。また，教科単位で図書館資料活用年間計画の見直しを行い，図書支援員を交えて，活用資料の精選，活用方法の工夫を検討した。

②学校図書館を活用した授業計画の作成や授業実践及び検証は各教科部会が中心となって，全ての教科で公開授業研究会を実施し，単元計画，指導案検討会等を通して，各教科における主体的・対話的に学ぶ探究的な授業づくりを行った。総合的な学習の時間においては，学年会が中心となって授業づくりを行った。全ての教科等において，指導案検討とともに単元計画，単元を通して付けたい力や単元を貫く問い，図書館資料の活用方法を検討した。指導案の様式もA3規格１枚（両面）に収まる形式に統一した。また，研究協議においても，研究仮説を踏まえ，

視点１　相手や目的に応じて自分の考えと，その根拠を明確に整理し，表現することができた。
視点２　目的に沿った話合いや意見交流により，自分の考えを深めたり広げたりすることができた。
視点３　図書館資料や新聞等を使って調べたり，話し合ったりする活動を行うことができた。
視点４　（各教科独自の）見方・考え方を働かせて，学習活動を行うことができた。

という共通の授業参観の視点を設定し，協議を行った。

各授業については，鏡野中学校授業スタンダードに則り，めあての確認，ペア・グループ活動，まとめの工夫，振り返りの充実に留意した授業が日々実践された。ノート点検における記述指導を充実させ，定期テストにおいては必ず具体的な実生活に即した活用問題を記述形式で組み込むことを全教科で実践した。また，「タテもち」を生かし，各教員が同じ指導案で授業を実践，参観し合って逐次授業をブラッシュアップさせた。

理科部会の取組を一例として挙げる。平成27年度全国学力・学習状況調査や平成28年度高知県学力定着状況調査の結果から，県平均正答率3.8%，本校正答率6.3%という定着の悪さが明らかとなった「観察記録を基に地層の広がりを考察する」問題の克服を目指し，理科部会では，1年生の「地層から読み取る大地の変化」において，運動場の改修工事に伴って実施されたボーリング調査の資料を活用した授業を実践した。単元を貫く問いを「鏡野中のボーリング資料を読み解こう」とし，身近にあるものを教材化すること，生徒は自分に関わりのあることと捉え，学習意欲を高め，持続させることができた。単元の最初にボーリング資料を提示し，それを読み解くために必要な知識として地質や地層に関する知識を学び，単元の最終段階で生徒がボーリング

資料を読み解くことを目指すように単元計画を立てた。

授業における，視点４に関しては，ボーリング調査結果から地層のモデルを作成し，生徒が情報を的確に収集しやすいように工夫し，ボーリングから得られた複数の地点の柱状図の資料を比較・関連付けてその地点の地層を推測できることを目指した。視点１に関しては，資料のどの部分を根拠として意見を述べているのかの指導を重視し，視点２に関しては，発問の工夫やヒントカードの活用，話合いの時の班の再構成などを試みた。

③香美市子ども読書活動推進事業に参加し，地域ネットワークの一端を担った。公開授業研究会では，香美市教育研究会各教科部会や，教科ネットワークの理解と協力を得て，それぞれの公開授業研究会と兼ねて実施した。

校内においては，昨年度より「読解力の向上」と「図書館活用」という共通の視点で，すべての教科で授業研究をすることによって，５教科と技能教科といった違いを意識することなく，教科間で理解が深まっている。また，俯瞰的な視点で学力分析を行い，学校としての課題を共有・協議する教科主任会において，本研究に関する取組を検討し，週１回の定例の各教科部会に主幹教員が参加することによって，各教科部会が共同歩調で研究推進できた。このように研究推進委員会⇔教科主任会⇔教科部会の形態をとることによって，従来の研究推進委員会⇔職員会⇔教科部会の形態に比べ，より組織的で機動力のある研究体制ができた。

（２）各種調査の分析や結果の検討を，各教科部会で行い，その検討内容を校内全校研修会で各教科のプレゼンテーションをもって教員全体で共有した。また，各教科の公開授業研究会では，各種調査で明らかになった課題の克服を目指した授業を実践した。

リーディングスキルテストの結果（表１）は，生徒の学力と正の相関があり，ほぼ全国的な平均値に近い値を示していたが，推論と具体例同定(辞書）に課題があることが分かった。このことより，「既存の知識と新しく得られた知識から，論理的に判断する」という論理性が弱く，「辞書の定義を用いて，新しい語彙とその用法を獲得する」ができずに，曖昧なままで言葉を使用している生徒の割合が多いことが明らかになった。また，この結果は，校内における各種調査の分析及び結果の検討と整合性を得，理論的な根拠となった。リーディングテストの校内研修においては，具体的な問題例を取り上げ，実際に全教員が解くことによって，生徒の躓きを知り，今後の指導の意識付けに繋げた。

評定	1	2	3	4	5
係り受け	17.5	14.8	20.2	24.2	23.3
照応問題	17.9	16.1	13.9	26.5	25.6
同義文判定	21.1	17.9	20.2	19.3	21.5
推論	17.9	26.9	17.0	23.3	15.2
イメージ同定	16.6	22.0	19.7	20.6	21.1
具体例同定(辞書)	29.6	16.1	28.3	17.9	9.0
具体例同定(理数)	20.6	13.9	25.6	23.3	16.1

表１：リーディングスキルテスト能力値別５段階評定の割合

４．成果と課題

（１）各教科公開授業研究より

理科の教科部会を例として述べる。これらの授業実践を通して，生徒ノートの振り返りなどから「鏡野中近辺の環境の変化が分かるようになった」という生徒の感想が得られ，また「もつと調べてみたいこと」に分類される記述が増えたことから，理科に対する興味・関心が高まったことが分かる。視点１に関する生徒の変容としては，自分の意見を理科的な表現を用いて表し，意欲的に説明活動に取り組む生徒が増えたこと，視点２に関しては，話合いの場での発言数が多くなり，それに伴って意見の多様性が広がったこと，視点４に関しては，グラフなどの資料から情報を読み取る力が向上し，読み取る内容に深まりが出てきたことなどが成果として挙げられた。

（２）各種調査問題による検証より

①昨年度の研究の結果から，「根拠を明確に整理し表現すること」や「連続・非連続テキストの読み取り」に課題があり，「意見交流の質を高める手立て」の必要性が明らかになっていた。今回の平成 31 年度全国学力・学習状況調査では，国語，数学において，全国平均以上を目指し，本校の平均正答率は全国と比較して，国語 - 2.8 ポイント，数学＋0.2 ポイントであった。結果の分析及び対策の検討において，国語の調査問題の「伝えたい事柄について，根拠を明確にして書く」などの結果分析から，複数の情報から適切なものを取捨選択し統合すること課題があることが明らかとなった。

②平成 31 年度高知県学力定着状況調査では，県平均以上を目指し，1・2 年それぞれ 3 教科で指標を達成した。結果について全国平均と比較して校内で分析を行ったところ，思考力・判断力・表現力では，平均正答率を超えて成果があったが，語彙力や基本的な知識や技能において課題があることが明らかとなり（表２），これを教員全体で共有した。

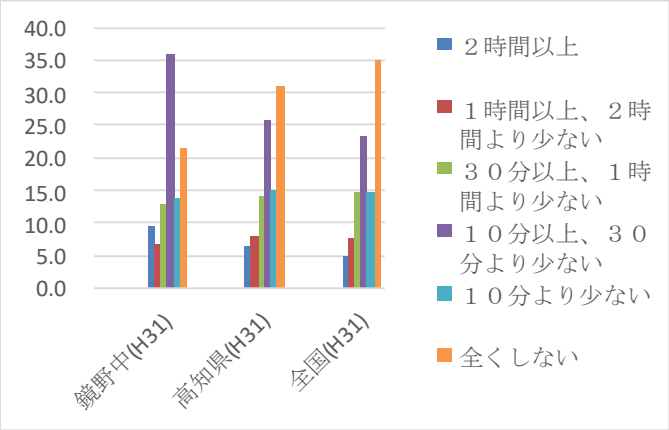
		1 年	2 年
国語	基礎	-2.7	-0.3
	活用	-1.1	-1.1
社会	基礎	*-5.8*	*-3.7*
	活用	**5.7**	**7.5**
数学	基礎	-2.8	2.3
	活用	**3.0**	2.3
理科	基礎	1.4	2.3
	活用	**8.5**	-2.5
英語	基礎	*-6.2*	*-15.4*
	活用	-1.9	*-7.4*

（黄色：3 ポイント以上マイナス　水色：3 ポイント以上プラス）

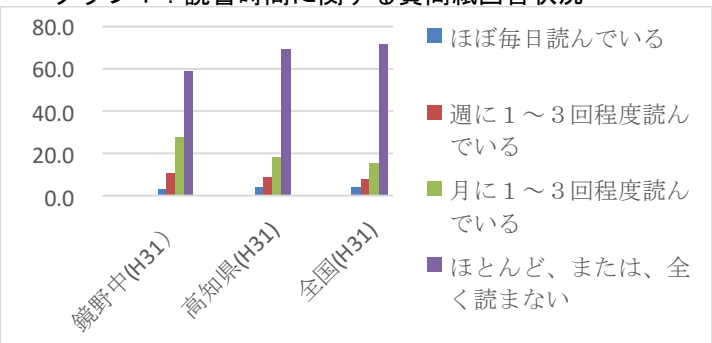
表２：自校の定着率と全国平均定着率の差

③質問紙における図書や読書に係る調査項目「学校の授業時間以外に，普段，１日あたりどれくらいの時間，読書をしますか」に対して「1 日３０分以上の読書していると全国平均以上を目指し，全国よりも１ポイント増となった。グラフ１に示されているように，全国と比較しても１０分～３０分の階級が多いのは，毎朝の１０分間読書が意識されたものと思われる。質問紙における図書や読書に係る調査項目の「新聞を読んでいますか」に対して，「週に１回～３回以上読んでいるを全国平均以上」を目指し，全国よりも１ポイント増となった。（グラフ２）幼少時より，家庭で新聞を読んでいる大人を見ずに

成長した生徒が増加の傾向の中，新聞を読むことの啓発活動として，興味・関心を引くような新聞記事を精選して校内の掲示板に掲示している。（図１）



グラフ１：読書時間に関する質問紙回答状況



グラフ２：新聞に関する質問紙回答状況

図１：毎日更新新聞掲示板

（３）授業評価アンケートによる検証より

①項目３「相手や目的に応じて自分の考えと，その根拠を明確に整理し表現することができた。」を指標に設定し，教科ごとに3.0/4.0以上の目標を設定した。各教科とも，年度当初よりも平均して0.2ポイント指標値を上げ，目標を達成した。（表３）技能教科よりも５教科の方が意見を表現する機会の多いことが分かる。特に国語科においては，思考ツールを活用し文章の論理的な構成を促す授業や，資料から読み取った根拠を基に意見文を書く授業などが実践されており，各種調査，テスト結果においても生徒は，文章を書くという行為に負担を感じることなく取り組むことができている。

このように，生徒の「自分の考えを表現する」ということに対する主観的な達成感は上がってきているものの，「根拠を明確に整理し表現すること」にまだまだ課題が残っているのが現状であるので，何を根拠にどのように意見を構成するかという論理性の育成に関して，今後も授業改善を継続していく必要がある。

教科	年度当初	２学期末	増減	教科	年度当初	２学期末	増減
国語	3.2	3.4	0.2	音楽	2.8	3	0.3
社会	3.2	3.5	0.3	美術	2.9	3.1	0.2
数学	3.3	3.4	0.2	保体	3	3.2	0.2
理科	3.2	3.5	0.2	技家	3	3.2	0.2
英語	3.2	3.3	0.1				

（小数第２位以下四捨五入による誤差を含む）

表３：授業評価アンケート項目３の推移

②項目４「目的に沿った話合いや意見交流により，自分の考えを深めたり，広げたりすることができた。」を指標に設定し，項目３と同様に，全教科3.0/4.0以上を目指し，目標を達成した。（表４）

このように，生徒の「話合いや意見交流があった」ということに対する主観的な達成感は上がってきている。一方で授業展開の中で話合いの場面設定は多いものの，その話合いが「自分の考えを深めたり，広げたりする」のに十分ではなく，そのための手立てが不十分であったという課題が残っている。

教科	年度当初	２学期末	増減	教科	年度当初	２学期末	増減
国語	3.3	3.6	0.2	音楽	2.8	3	0.3
社会	3.3	3.6	0.3	美術	2.9	3.2	0.2
数学	3.4	3.5	0.1	保体	3	3.3	0.3
理科	3.4	3.6	0.2	技家	3.1	3.3	0.2
英語	3.3	3.4	0.1				

（小数第２位以下四捨五入による誤差を含む）

表４：授業評価アンケート項目４の推移

③項目７「授業では，図書館資料や新聞等を使って調べたり，話し合ったりする活動を行っている。」に関しては，全教科3.0/4.0以上を目指したが，達成したのは国語と社会だけであった。（表５）教科によって指標達成度が異なる要因の一つ目としては，中学生の教材として活用できる図書館資料を，何種類用意できるかということである。生徒の発達段階や多様性に考慮して多くの種類を集めなければならないが，教科によって種類の多さに開きがあった。要因の二つ目としては，その図書館資料を読むために，どの程度の基礎知識が必要かということである。小学生向きに書かれた平易なものでは学習の深まりがなく，大人向けに書かれたものには教員の補足説明が不可欠になる。また，その図書館資料を読むことができる読解力を生徒が有しているか否かを検討する必要があった。比較的基礎知識が少なくても読むことのできる図書館資料がどれくらい用意できるかによって，利用方法が左右されてしまう。要因の三つ目としては図書館資料を単元のどこでどのように活用すれば教育効果を高めることができるかを検討することにある。限られた授業時数の中で，技能の習得に重点が置かれた単元が多くなると，図書館資料を活用する授業の時間数が必然的に少なくなってしまう。

教科	年度当初	２学期末	増減	教科	年度当初	２学期末	増減
国語	2.9	3.6	0.7	音楽	2.1	2.3	0.2
社会	2.3	3.1	0.8	美術	2.2	2.5	0.2
数学	2.3	2.5	0.2	保体	2.2	2.4	0.3
理科	2.3	2.7	0.4	技家	2.4	2.5	0.2
英語	2.3	2.8	0.5				

（小数第２位以下四捨五入による誤差を含む）

表５：授業評価アンケート項目７の推移

（３）授業力チェックシート（教員用）による検証より

①項目５「教科の特質を生かした方法で自分の考えを表現できるよう，手立てを工夫している」

②項目６「ねらいを達成するために，話合いや交流の目的を明確にしている。」

③項目９「児童生徒の知識や考えを広げたり，深めたりするために，図書館資料や新聞等を効果的に活用している。」の３項目について，年度当初から年度末にかけて，４段階評価に換算して平均して0.5ポイントアップを目指したが，0.3ポイントに止まっており，目標を達成していない。項目５については，生徒に対して「自分の考えを表現する」のみならず，「根拠を明確に整理し表現すること」まで要求しているため，項目６については，授業の中で話合いの場面を観察して，単なる意見交換ではなく，考えを深めたり，広げたりすることができるほどの話合いを要求していることが原因と思われる。

項目	年度当初	年度末	増減
項目５	2.9	3.2	0.3
項目６	2.9	3.2	0.3
項目９	2.1	2.4	0.3

表６：授業力チェックシート（教員用）の推移

また，教員アンケートに本校独自の項目「教科部会は自分自身のスキルアップにつながっている」を加え調査したところ，肯定率92%で，教科部会としての組織的な授業改善力を高めることは，個々の教員のスキルアップにもつながっていると考えられる。

（４）図書館資料新聞等を活用した授業の資料リストの作成より

「校内で３０案以上作成」の指標に対して，２７案が集まり，９割方目標を達成することができた。要因としては，教材開発，単元開発による授業改善，教員の図書館資料に関する理解や，情報活用能力育成の必要性に関する意識の向上，生徒の読解力関する意識の向上などが挙げられる。

（５）校外の研究組織との連携より

本年度より公開授業研究会を香美市教育研究会各教科部会や教科ネットワークの教科部会と兼ねて実施した。このことによって，各組織の組織力をもつて参加人数を増やし，本校の研究成果をより多くの教員に知らせることができた。（表７）

教科等（学年）	参加校数	参加者数	開催方法
美術科（３年）	7	13	市教研または教科ネットワークを兼ねる
社会（2年）	16	27	
数学（３年）	9	26	
理科（１年）	11	23	
上記４教科の平均	11	22.3	
技術（1年），保健体育（3年）	5	18	同日開催
総合的な学習の時間(3年)	2	20	
家庭科（２年）	1	10	
音楽科（１年）	3	10	
上記５教科・領域の平均	2.8	14.5	

表７：公開授業参加者人数

（６）今後の取組

まず，研究仮説に基づいて，本研究を振り返るならば，探究的な授業づくりにおいて，毎回の授業において授業のめあてを明示するなど，指導者が目的を明確に示すことは常にどの場面でも実践されている。

情報を的確（論理的）に読み解かせたり，情報を整理・比較してその関係性を捉えさせることに関しては，情報源を図書館資料に求める場面が全教科で見られ，年々多くなってきた。しかし，生徒に情報を選択させるために，関連あるページに付箋をつけておくなど，情報選択のための事前準備が必要不可欠であり，適切な図書館資料を適量の冊数で集めることができるか否かという点にも課題がある。

生徒は，自分の考えや意見をもってはいるが，情報活用能力に関しては現在高まりつつある状況で，根拠を伴った論理的な表現もまだまだ十分とは言い難い。

自分の考えや意見を表現させる場の設定はつねに行われているが，話合いを通じて自らの考えを深めるための指導も工夫の余地がある。

従って，現時点では，生徒は主体的に読んで自分の考えをもち表現しているが，「どうして？」「なんとなく」の問答に現われているように，感覚的な根拠が論理的な根拠を凌いでおり，的確な表現には達していない。

昨年度からの課題である「意見交流を深め，質を高める手立て」について，今年度も解決に向けての取り組みを実践して来たが，いまだ十分な成果を得られていない現状がある。また，今年度は，情報活用能力の育成に焦点を当てて取り組んできたものの，各種調査やテストの結果から，語彙力や定義の定着など，基礎基本の知識・理解が教員の期待値よりも不足していることも明らかになった。このような現状を踏まえ，今後，各教科部会において策定する単元計画の中では，基礎基本の定着の時間とペア・グループ活動を通して話合いを深める探究的な時間を効果的に組み合わせ，鏡野中学校授業スタンダードの柔軟な運用を行うことを全体で確認した。

そして，「意見交流を深め，質を高める手立て」を検討するにあたって，情報を的確（論理的）に読み解き，情報を整理・比較してその関係性を捉えるという情報活用能力の不足が十分な成果を得られていない原因の一つであることも明らかとなった。意見交流を深めるためには，視覚から得る情報としての文章の読解力と共に，話合いのときに必要とされる聴覚から得る情報の読解力の育成が必要であり，そのために，生徒指導，基本的な生活習慣としての「聴く」という指導とともに，要点をつかみながら聞く，全体のイメージを想像しながら聞く，比較しながら聞くなどのような「聴く」指導を教科指導の中で検討していくことも全体で確認した。

今後，教科主任会が各教科部会を統括し，各教科部会で課題克服に向け焦点化した具体的で共通した実践を行うことによって，これからの授業研究が学校全体にいきわたり，成果が効果的に得られることを期待する。